

集団心理治療に於ける母子関係

山松質文・並河信子・丹下庄一・鈴木節子

The Relationship between Mothers and Their Children in Group Psychotherapy.

BY TADAFUMI YAMAMATSU, NOBUKO NAMEKAWA,
SHOICHI TANGE AND SETSUKO SUZUKI

序 説

集団心理療法に関しては既に若干の知見を得ることができる。例えばAxline, V. M.,⁽¹⁾ Dorfman, E.,⁽²⁾ Hobbs, N.,⁽⁶⁾ Slavson, S. R.,^(8~18) Ginott, H. G.^(5・1~5・2) 等があげられるであろう。前三者は来談者中心療法の立場にあり、後二者は分析療法の立場にある。

また Dreikus, R.⁽³⁾ や Fox, L.^{(4)*} 等も Adler 流の一種の分析的の立場に立っているものと思われる。

さてわれわれは元来来談者中心療法の立場にあるものであり、SlavsonやDreikus またはFox の立場を理解しつつも、目下のところ来談者中心の立場を徹底したいという心境である。

それは、集団治療面に於けるあるひとりの Cl と Co とのかかわり合いが、他の集団の構成員に影響を与えずにはおかないであろうという考えのもとに、集団に於ても Co はあくまでも個と個との関係を尊重する立場をとろうということに外ならない。

この点 Adler 流の考えに従う Dreikus や Fox の立場とは方法的に対照的である。即ちある程度 Co が個と個との関係よりもむしろ常に集団全体の言語以外の行動面の動きを目標志向 goal-directed⁽³⁾ という立場から理解しようとするのとは、相当方法的にことなるのである。

分析的な立場では、指向的・刺激的・拡張的・説明的などの諸機能⁽¹³⁾ が考えられているが、われわれはそれらを意識的に取り入れようとはしていない。しかし Slavson も述べているように、例えば話が散漫になったり、話題の変化があまり頻繁になったりすることや、⁽¹⁴⁾ ステレオタイプ⁽¹⁵⁾ に流れたり、逃避や見逃し⁽¹⁶⁾ がみられたりする場合などに如何にかかわって行くかについて、彼我の持味を比較するのも重要且つ興味のあることであろう。

最後に Slavson も指摘するように、心理療法に於ては、改善しよう・変えようとする意志に頼ってはならない⁽¹⁷⁾ という考えは、Rogers の立場と基本的には極めて近いものといえようか。

* 彼は元来は来談者中心の立場に立っているが、現在はこのような試みを行いつつある。

** 面接場面に於けるCl (Client) とCo (Counselor) の関係の中での経験重視という意味に於て

要するにわれわれの目下の課題は来談者中心療法がそのまま集団療法にも適用できるかどうかということである。

本研究は元来この意図のもとになさるべきであったのではあるが、今回の報告では母親のカウンセリングと子どもの遊戯治療それぞれのダイナミックスをとらえ、両者の関係をみるのにとどめた。

問 題

集団療法の経験を通じてそのダイナミックスを研究する。

方 法

I. 来談者中心療法による。

II. 母親のカウンセリングと子どもの遊戯治療を同時に併行して行う。

III. 原則として毎週1回1時間宛（毎月曜1530～1630）実施。

IV. 集団に参加する来談者は母親および子ども共にそれぞれ4名宛。

V. 集団は閉鎖集団とした。

VI. 研究参加者

母親のカウンセラー 山松質文、子どもの遊戯治療者 並河信子

母親の観察者 鈴木節子、森 美智子 子どもの観察者 丹下庄一、仲渡佳子

VII. 資料の整備

カウンセリングのみは各回必ず録音し、再生にもとづき記録を作製する。

各回毎に治療終了後上述研究参加者により必ず討議を行う。

来 談 者

I. 症 例

1) **Ok** 男 6才5月* 主訴：動作が遅い、何もする気がない、友達がない、夜尿（起さないともらす）など IQ:118（鈴木ビネー） 発育状況：帝王切開による出産（母親に心臓疾患—心室中隔欠損症—があるため）、出産時標準より小、頸部リンパ腺肥大 家族構成：父 43才（勤務医）、母 38才（自宅業医）、祖父 72才、祖母 67才、叔母 36才、叔父 32才（会社員）

2) **Ki** 男 6才2月 主訴：注意力散漫、集団に参加できない、行動が現実離れがしている、妹をいじめるなど IQ:112（鈴木ビネー） 発育：別に問題なし 家族構成：父 36才（会社員）、母 32才、妹 4才

3) **Ka** 男 5才10月 主訴：短気、ひがむ、積極的に遊びたがらない IQ:113（鈴木ビネー） 発育：別に問題なし 家族構成：父 44才（公務員）、母 39才、弟 4才、祖母 72才

4) **Ni** 男 6才8月 主訴：感情の動きがはげしすぎる、弟とはげしくけんかをしたり、すぐく仲

* 来談当初の年令、以下凡てこれに準ずる

がよかったりする、弁当を食べるのがおそい。IQ:115 (WISC) 一言語112, 動作114—発育:3才のとき喘息の発作が著しい, 4才頃から発作なし 家族構成:父 37才(商業デザイン), 母 35才, 弟 4才

Ⅱ. 来談表

回次	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
日付	38 12/16	39 1/13	1/20	1/27	2/3	2/10	2/17	2/24	3/2	3/16	3/23	3/30	4/6	4/20	4/27	5/4	5/11	5/18	6/8	6/15	6/22
来談者																					
Ok	○	○	○	○	○	×	×	○*	○	○	○	×	×	○	×	○	×	○	○	×	×
Ki	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	○	×	○	○
Ka	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○
Ni	○	○	○	○	○	○	×	×	○	×	×	×	○	○	×	×	×	○	○	○	○

22	23	24	来談率
7/13	9/21	9/28	

結果および考察

×	×	○	14/24
○	○	○	20/24
○	×	○	21/24
×	×	×	13/24

結果の整理にあたっては、専ら Co* と Th** の体験にもとづき観察者の記述は参考にとどめた。カウンセリングについては紙面の制約もあり、カウンセリング場面で語られた内容についての記述はできる限り省略し、主とし

* 代理者(叔母)が来談して集団の動きや集団員の感情の動きに重点をおいた。遊戯治療についてはある程度の内容の記述をも加えた。

以下各回毎の記述にもとづき大きく三期に分け要約的記述を試みたが、カウンセリングと遊戯治療の記述は、それぞれ全く独立に行われたもので、各期の分け方も Co と Th の随意にまかせ、必ずしも一致させようとしなかった。

Ⅰ. カウンセリングの過程分析

1) 全過程の区分

A) カウンセリング場面での Cl の行動像からカウンセリングの過程を大別すると次の通りである。

第1期 ①～⑦*** 現象面にとらわれている時期。①～⑤では全員が出席している。⑥から Ki の受容的態度がはっきりしてくる。Ni は最初から自分本位で、もっとも現象面にとらわれている。

第2期 ⑧～⑬ 全体的に感情表出が盛んとなり、Niを除き受容的で自己批判がでてきている。特に Ki のそれがめだつ。

第3期 ⑭～⑲ カウンセリング過程を通じての Cl**** の成長度(心理治療の効果)に著しい個人差がでてきて、それが決定的になってしまった。

1) ⑭～⑲ Ok の成長が特にめだち、受容度、自由さが増大する。特に⑲は Ok のかってみない

* Counselor
** Play-therapist
*** ①, ⑦等は来談の回次
**** Client

卒直な感情の表出がみられ、Co が Ok への関心を深め、Co 自身の成長への一契機ともなったと感じられる面接場面で、全過程の一つの山をなしていると思われる。

Ni が明らかにとりのこされた感じの時期（逆に Co が Ni に新しい関心をよせかけた時期）

2) ②③～②④ Ka の受容度、自己批判がめだつ。Ka は一貫して知的水準での受容に定着し、Ni は他の三者から著しくかけはなれた低い段階に低迷している。外罰的で自己批判にかけている。4人の成長度は、Ok, Ki, Ka, Ni の順で、Ok または Ka, Ka と Ni との間にそれぞれかなりの落差がみられる。Ok の自己決定、Ok の母子関係の安定などが特記される。

B) 母親の学校に対する関心から分類すると次のようになる。

第1期 小学校入学まで ①～③（上記の第1期+第2期にあたる）

入学を前にひかえ、不安とあせりを感じている時期

第2期 小学校入学以降順調に通学していることへの一時的安堵の時期、担任がまだはつきり子どもをつかんでいない時期 ④～⑨（ほぼ上記の第3期の前期にあたる）

第3期 学校にややなれ、再びでてきた子どもの地金に担任が気づきはじめた時期、担任の評価を気にする時期（ほぼ上記の第3期の後期にあたる）⑩～②④

2) 全過程の要約

第1期 最初 Ok から、子どもの附小入学のことでやっきになっている感情がつたえられ、それに対し他の三人は、心の中では同じ感情をもちながらも、あるいはそれ故にか、一種の嫉妬にも似た嫌悪感をいだいたようであった。やがてだんだん小学校入学が近づいてくるといまで比較的冷静であったはずなのに、学習面のことから、簇のことにいたるまでうまくいっていないのでだんだん不安になってきた。Ka はしゅうとめの間がうまくいかぬことが問題の中心ではあるが、自分が子どものときにしつけられたように、子どもを何とかきちんとしつけたいという気持がつよく、自己批判的ではあるが人格に固さがある。

Ni は自分勝手に話しまくり、自分の考えをおしつけるような傾向がみられ、他の人のいうことはあまりきいていない。Ki は最初からある程度子どもの問題を自分とのつながりに於て認識しているようであるが、子どもの行動があまりにも現実ばなれがしているように思えてならないという心配がある。

Co には、はじめ Ok とどのようにかわるかが一番問題のように思われたが、回次を重ねるにつけ、むしろ Ni とのかかわり方の方が問題ではないかと感ずるようになった。Ka の固さも多少気にはなった。Ki はいいたいことが一杯あるらしいが発言の機会が少くいることが Co にとって気になった。Ka と Ki とは気持が接近しているように思われた。

第2期 無事入学し、また按ずるほどのこともなく、とにかくにも元気で通学しているので全員ほっとしている感じである。Ok は附小入学が許可され、母子ともに肩の荷がおりたという解放感を味っているようだが、母は生来病弱（来談率の悪いのもそのため）の上に仕事が忙しく、しゅうとめ等に子どもの愛情がうばわれるようでたまらないという強い感情を卒直に表明するなど、特に⑩の激しい感情吐露を一つの契機として、いちじるしく成長して来たように思われる。はじめにみられたよ

うなゆとりのない差し迫ったようなけわしい表情は消え、明るいうとりのある表情に変わっていった。この頃から皆を受入れるくったくのない明るい態度がみられ、また皆からも受け入れられるようになって来たように思われる。Ok の参加は一つの活気を与えるようになった。Ka は大きな変化はないが⑩では Ok に対しカウンセラー的役割を果たすなど性来のおだやかな比較的安定した態度にみるべきものがあり、カウンセラー的役割をするが、受容の次元が浅い。やはり固さが成長を疎害しているように思われた。⑩を契機として Ok と Ka がぐっと接近した感じである。K' は最初から自分の問題と取り組む心構えがあったように思われ、成長は著しいとはいえないが、はじめからある高い水準を保っていたものと思われ、この期では水準的には Ok に次いでいるが、子どもの問題性は深く解決への見通しはまだ出てこない。Ki もひかえ目ながら、カウンセラー的役割を果たすが、Ka に比し次元が深いようだ。Ni は欠席も多いが、発言数が多いのに反比例して動きはもっとも少く、皆からも深い関心はもたれていないようである。他の三者との間に大きな開きができたことを感じている。Ok と Ki, Ki と Ka, Ka と Ok の組み合わせでは、話し合いが順調に進むが、Ni の参加は他の集団員の誰にとっても話し合いの進捗に影響するようであった。

第3期 学校にも馴れ、子どももぼつぼつ地金がでてきて、担任もそれに気がつきはじめる。そうした担任から受ける情報に再び不安になって来る。但し Ok のみは、あまり気にしなくなってきた。子どもの問題もずっと減って来ているようである。Ka は学習面よりも人格形成面を重視したいとの気持はあるが、学習面もほっておけないなど、何かと心配である。

Ni は学習の問題が人格形成より優先するかのように考えているようだ。この辺にも両者の間に大きな開きがでてきている。担任に対しても、もっとも批判的である。

Co は Ok に対しては終結に近づいたことを感じ、Ki に対しては個人治療の必要性を痛感し、Ka に対しては事情がゆるせば個人治療を考慮している。Ni は早晩来談しなくなることが予測される。

3) 個人別の考察

Ok は小学校入試が一つの山で、これを無事通過して、親もほっとしてやかましくいなくなり、子どもも解放感を味わうことができたこと、母親がその頃病気のため寝つくことが多く、子どもが自分から次第に離れ、祖母や叔母との結びつきが次第に強くなるような感じがすることから、あせりがみられたが、同時にまた自分をつきつめてみる機会も得たわけで、母親がそうした事態の中で成長したことは、子どもに好影響を与えずにはおかなかった。来談回数は少い(14/24)にもかかわらず面接場面での成長はめざましかった。

Ki は子どもの偏った行動(自慰、妹への嫉妬と劣等感、母親への女性的な執着、放心状態など)が何か自分のいままでの躰が悪かったせいだと反省するが、時には治らぬのではないかと不安もいなく、だが一方演劇に対する才能*などの希望的側面もある。子どもには幾多の問題点を残しているが、母親としての問題認識にはみるべきものがあるようだ。来談出席率も高い(20/24)。

Ka は、まじめで凡庸面であるが、人格の固さがみられ、そのためか知的水準での理解にとどまり

* Co は直観像素質者 Eidetiker と推定し、若干の tests を試みているが、年令的制約もあり、現在のところ判然たる資料は得られていない。

がちとなる。しゅうとめの問題も未解決ではあるが、それもだんだん話題にのぼらなくなったし、子どもの問題は、もっとも軽度のものである。来談出席率が高い(21/24)が成長のあゆみは比較的によい。

Ni は来談出席率は低く(13/24)、成長度ももっとも低く、子どもの問題が自己との関係に於てとらえられていない。

Ⅱ. 遊戯治療の過程分析

1) 全過程の区分

第1期 ①～⑤

a) 全員がグループになれてきた。(各自の名前をおぼえるなど) b) 個性がはっきりつかめてきたとともに、集団の特長もはっきりしてきた。c) 欠席者が1人もなく全員出席がつづいた。d) Ok の Th に対しての妨害的態度がはげしい。Th は Ok をグループから出してほしいと提唱したほどである。*

第2期 ⑥～⑮

毎回夫々質的に異なりまとめにくいという特徴のある時期であるがさらに細分できる。⑥～⑧ a) 前回まではたださわがしい1つの集団であったが、協同意識がでてきた。b) 毎回誰かが欠席している。c) Ki が毎回ペットの蛙の玩具を持参する。⑨～⑮ a) Ok はあうたびに成長している。b) Th は相変らず緊張の連続だが、Ok に対するしこりのようなものがなくなり安定してプレイができる。

第3期 ⑯～㉔

治療効果の程度の差がはっきりしてきた時期でありさらに次のごとく細分できる。⑯～⑲ a) グループの協同意識のうえに協同雰囲気のようなものが加わる。b) Ok が好転したのを顕著に感じる。c) Ni の発言が子ども達の間でとらえなくなった。d) Ka が他児なみに活発になってきた。⑳～㉔ それぞれの組合せがはっきりしてきた。a) Ki と Ni は特に仲が悪。b) Ki と Ka は基本的に気持があうように思う。c) Ok は第1期にはや、グループから外れていたが、現在は同列で人気すらある。d) Ki は人間関係に割合気をつかい、後半ある。e) Ka は誰とも争いにならず中立であるがいじめられることはある。f) Ni はや孤立してきた。㉔～㉔ 夏休み後で集団が整理されていく過程のように思う。即ち Ni は集団から離れており、Ok は離れてもよい状態だと思う。

2) 全過程の分析

第1期 主訴はどの Ch も消極的・引込思案などであるのに、プレイは初回から非常ににぎやかで活発である。初回は集団プレイは少くペアは次々にかわりアソビの内容もまともにはなかったが、徐々に個人プレイをしながらも相互間のラポートはつくようになっていった。初回から攻撃的なプレイが多いが次第にその度が強くなり、積木を倒したり多量の水を室内に流す。個人的に内容をみると Ok はタイヤをころがし、Ki はダンプカーをはしらせ、Ka は熊の指人形を使い、Ni は画用紙などを用い

* セラピー終了後の研究会で Th からこのことが提案されたが、Co から Ok も皆と同じように受入れていくのではないかと提案があり話し合いがまとまった。

て製作するなどそれぞれ特長のあるアソビをしている。Ok は子どもらしくなく 顔色も悪く Th に対して妨害的で苦情が多い。第5回目はその頂点に達したようである。Ki は乗物に酔うらしくプレイのはじまりは調子がのろく、time up は特にまもれない。Ka はおとなしくめだたないが自分のしてほしいことを電話に託していうことが多い。Ni は自分からいいだして新しいアソビをしがちである。5回迄欠席者は1人もなく、各自の名前をおぼえるなどグループになれてきた。全体に time up はまもりにくい。Th の過労ははげしい。Th は第5回のプレイのあと Ok をグループから出すことを希望した程接するのがむつかしくなった。1回から5回までは第6回以後と比較するとまとまらないが活気があるという一貫した時期である。

第2期 毎回誰かが欠席していることが多く個人プレイの時もあった。前回まではたださわがしい1つの集団であったが、協同で家をつくったり、共通の話題で話すこともできるなど共同意識もでてきた。しかし一方同じ材料(粉絵具)でそれぞれ異ったアソビもする。毎日が夫々質的に異なりまとめにくいという特長のある時期だと思う。Ok はひねくれたことを言わなくなり、会うたびに子どもらしさをとりもどしていくように思う。Ki は数回ペットの蛙を持参し、Th によく話しかけ(内容は現実ばなれがしている)アソビは後半興奮しがちである。Ka はだんだん元気になるがいつも中立的でやや批判的、なお女の子の好むようなアソビが多い。個人プレイの時はよくしゃべるがはっきりした意見を言わない。Ni は特に来る度に態度がちがいが或時はリーダーになって家づくりをしたり、やたらにものをなげたりするが、やや友人に対して意地のわるいところがあり、時々 Ki とはげしい争いを展開する。Th は相変らず緊張の連続だが Ok に対するしこりのようなものがなくなり、安定したプレイができるようになったが Ni との関係は深まらない。第6回より第15回迄は毎回それぞれに異なり、まとめにくいという特徴のある時期であるといえよう。

第3期 グループの特徴としては単なる協同プレイのうえに情緒的な雰囲気の流れだした。一方それぞれの組あわせもはっきりしてきた。例えば Ki と Ni は特に仲がわるい、Ka と Ki は基本的に気持があうなどである。Ok は顕著に好転してきたのを感じる。初期にはやや仲間から外れていたが今はやや人気すらある。Ki は前半割に静かだが time up 近くにひとあはれする。言語内容が興味深い。Ka は他児なみに活発になってきた。Ni は出席率も悪く治療効果は顕著でない。発言が子どもたちの間でとおらなくなってきたように思う。この時期はグループの雰囲気に情緒が加わる一方それぞれの組合せもはっきりし、集団が整理されていく過程のように思う。

3) 個人別の考察 Ok の初対面の印象は、子どもらしくないというか、可愛げのないそして血色の悪い子どもだった。プレイをつづけるに従ってますますその感を深くし、ひねくれたものの感じ方をすること、命令形の発言が多いことが気にかかった。Th に対しては、身体でぶつかってくるような直接攻撃を加えるとよりむしろ陰性な、Th を困らそうと試みるような妨害的攻撃をたえずつづける。そのため Th は取扱いに困り、第5回目のプレイのあとで Ok をグループから出すことを提唱したほどである。カンセラーと協議の結果ひきつづき集団の一員として受入れることになった。Th は Ok のどのような行動にもおじけずその底に流れているものを明確化するようにした。第6回からは附属の入試その他で Cl の出席率が落ちたが、くる度に Th との距離は近づき、やがて他児と

同時にみることが出来るようになった。そして現在のところグループの中で一番成長したこと、即ち治療効果をあげたことを感ずるのである。グループ仲間からも初期の段階ではキチガイ*とつぶやかれたこともあり、争いもあったが現在はグループの一員としてある種の活気をあたえる役さえなしているのを感じる。また他のメンバーも Ok を知ったことによって、自分をみつめたり、世界が広くなる経験をしたのではなかろうか。現在 Ok は欠席がちであるが、表情も子どもらしく血色もよくもう終結段階にいるのを感じさせる。Th は Ok を集団にとどめることにやや抵抗を感じたのは事実であるが、今考へてみると続けたことが却ってよかったのを痛感するものである。また4人のメンバーの中でこの Cl だけが集団遊戯治療で効果をあげたケースであるといいきれのではないと思う。

Ki はプレイ時間の始めのうちは調子がのろく、間に時々時間をたづね、time up は特にまもれない。Th に対しては言語で攻撃しても基本的に好意をもっているのを感じるし、それは今にいたるまで一貫している。自分の感情や経験を Th に精一杯報告する。少しなれてきたころから数回ペットの蛙を持参し、それを擬人化してあつかう。(或る製薬会社からでているもので、Cl は数十四もっているらしい)。オナニーがひどく、(ズボンの外からこするようにする。ときによって本当におしっこに行きたい時もあり、その区別がむづかしい) 特に治療中期がひどかったように思う。つぎに(1) 第1期には Ok と第2期以後 Ni との間に時々争いを生じ、特に Ni との争いは質がはげしく、感情を抑えているように見られるが、time up ちかくにアソビがひどくあれ、それがやや習慣化してきたのも、その争いが原因の一つとも考えられるので落着いてプレイをさせたい。(2) 話題はゆたかで創造性は高いものと思うが、夢の話・ヒミツについてなど現実離れのした会話が多く、Th としてはその話をもっと深くきいてあげることが出来れば Cl をもっとよく受入れることが出来治療効果もあがるのではなかろうかと思うが、グループではそこまでゆきとどかないのを感じる。

以上(1)(2)の意見を中心にこの辺で個人に切り変えたいのであるが、一方喧嘩をしたりグループの影響を受けやすいだけにまたグループから良い影響もいろいろ受けているのではないかと思います、Th としてもやや確信の薄い現状である。いづれにせよ Th としては今迄に治療効果をあげたとはいいいきれないが、これからこそプレイをつづけて Cl のもっている Th に対する好意にこたえたいというかこたえるべきケースではないかと思う。

Ka についてははじめしばらくの間の印象をまとめると、(1) おとなしいが人なつこい表情を時々する。(2) 時折ちやめつけのあることを言う。(3) あたたかいところがある。(4) 自己主張が少なすぎる。(5) 女の子のようなプレイが多い。(6) 問題が別にないと思う時もあるなどがあげられよう。Ok のように特別な変化はないが6月に入ったところ(第10回)から、他児なみに活発になったように思う。この Cl もグループの中でやや積極的になったと思うが、自分よりは異常な Cl たちばかりの中で自分をみつめたことと思う。争いの対象にはならずそなわった中立性を持ち、他のメンバーも Ka との関係は自由に見える。しかし他児が欠席して1人でプレイをした時、「1人の方が良い、みんながいるとほしいものでも遊べない」と言ったので、Cl なりに辛棒していたのを感じた。グループの一員としては大きな役割を果たしながら、Cl 自身が目立った進歩を示さないのは性格のか

* 関西の方言：キチガイだよの意

らが固いのではないかと思うが追求すべきと考える。

Ni は第1期にはややリーダー的で主になって次々アソビを工夫する。第2期に入って冷いというか思いやりのないところがある。協調性にかけているなどに気付いたが、回数が進んでも余り好転していない。いろいろアソビを創作するところは変りないが、攻撃的なプレイや喧嘩が却って多くなったように思う。一方気の小さいとか気の弱いところもある。いつもグループのリーダーでいたかったのではないかと思うが、そればかりではいられなくなった。即ち攻撃をメンバーに加えれば、自分もまた受けねばならぬことを身を以て学んだのではないかと思う。他の事情もあろうが出席回数も途中から少くなり、中断の形となっているので心残りのCIである。

Ⅲ. 集団治療の諸条件についての考察

1) CIの数 ここでは母子共それぞれ4名 Slavson, S. R.⁽⁹⁾によれば理想的な子どもの数は5～6人であるという。従って人数の点では別にとりたててここで問題にすることはないように思われる。

2) 性別 ここでは何れも男子であるが, Ginott, H. G.⁽⁵⁾⁽⁷⁾によれば, 幼児は男女一緒に差支えないが, 学童では男女別がよいという。われわれの場合は年令的に丁度両者の境界線域にあると思われるので, 同性の集団と異性の集団との比較が興味のあるところである。

3) IQ ここでは112～118のものを集めたが, Slavson, S. R.⁽¹²⁾によればIQは重要な基準にはならないという。もう少し変化性に富んだ方が却ってダイナミックな動きがみられたかも知れない。

4) 年令巾 ここでは5:10～6:8で年令巾が1年未満となっている。森協要によれば年令差は1年以内であることが最も望ましいと⁽⁷⁾。Slavson, S. R.⁽¹⁰⁾によれば, 基本的年令分布は2才の開きがあると述べている。森協要も指摘するごとくこの点に関しては理想的であるようである。

5) 母親の年令巾 ここでは32～29才で大きくない。Slavson, S. R. は親と子ほどの年令差のあるものを一緒にの集団にしてはならないが, 成人の場合はかなり大きくてもかまわないと述べている⁽¹⁸⁾。

6) 家庭の教養程度 多少の変化性はあるが著差はない。母親の学歴はOk, Kiが旧制専門学校卒, Ka, Niは旧制高女卒, 父親の学歴はOk, Kaは旧制大学卒, Niは旧制専門学校中退, Kiは旧制中卒である。この程度の変化性は望ましいのではないか。

7) 同胞数 Okは1人子, 他は2人きょうだいの長子であるが, 母親間に共通の話題があるから発展するであろうと思われたが, 逆に話題の相異の中から自ら共通点を見つけだす方がより創造的であり得てよいと思われる。

8) 主訴 ひっこみ思案, きょうだい嫉妬, 非社会性など共通した問題をもつが, 却ってダイナミックな動きを少くさせたのではないかと考えられる。Slavson, S. R.⁽¹¹⁾によれば, ひっこみ思案の傾向のものばかりの集団は治療効果がないというところも一考を要する。

9) 問題性の深さ ここで取扱った子どもの間ではかなり大きい巾があった。集団構成にあたって一集団内での個人間の問題性の深さの許容巾についても研究しなければならぬことを痛感した。このことは以上に挙げてきた問題とはやや次元を異にするものと思われる。

10) **集団構成の基準** 治療に先立って、治療者が集団構成についてのイメージをつくりあげるにあたって、intaker から得られたある程度診断的な情報のみにたよることは危険であると考え。これを防止するためには治療者自ら intake を担当し、自己の責任と判断にもとづき治療へ移行するものは移行すべきであるとする。これは相談機構にもかかわる問題であるので、その意味でも問題を提起したい。

現にわれわれの経験では、Ni は intaker の希望により集団に加えたものであるがNi の参加は、カウンセリングに於ても遊戯治療に於ても、全体のダイナミックな動きを弱める原因となったように思われるのである。

また治療者自ら intake したとしても、あらかじめ個人治療をすすめ、一定期間後に集団に移行してもよいかどうかを考えた方が堅実であるように思われる。ただしわれわれの場合もそうであったように、集団治療を行う理由としては、相談機能の許容力の限界性という現実の問題がからんでおり、純理論通りには行かないことも考慮しなければならない。

11) Adler, A. 流の考えに従えば、人間は元来社会的な存在であり、 集団に入れば自分自身にならざるを得ない、治るということは社会に入ることなのだが⁽³⁾⁽⁴⁾、われわれは、Kiの問題性の深さを考え、個人治療にきりかえることにしたので、十分この真理をたしかめることはできなかった。また Co が刺激提供者と受容者の二重の役割を演ずることなく⁽⁴⁾、専ら本来の来談者中心療法の立場に立ったのも、われわれ治療者の現時点に於ける心境のしからしむるところであったことを附言しておく。

Ⅶ. 今後の対策

1) Ok は一応問題は解消したものである。母子共に、著しい人格転換がみとめられ、終結して差支えないものである。

2) Ki は問題が比較的深いので、個人治療に移行した方がよいように思う。

3) Ka は最初から問題性は浅く、ある程度不可避免的なよめしゆうとめの宿命的な問題が残っているので、個人治療に移行するのが理想と思われるが、相談機能の許容力を考慮して打切ること考えられる。

4) Ni は問題は母子ともに残っているが、未だ十分に心理治療の意義が理解されず*、早晚来談しなくなるものと予想される。

5) 遊戯治療室の大きさの問題 Slavson, S. R.⁽⁶⁾ は、遊戯室の大きさは、仕事に必要な家具の面積の5倍が適当と述べているが、今回の2倍程度にすぎず、そのため子ども達が興奮状態に陥りやすかったのではないかと思う。

結 語

I. 治療過程の区分に関しては、カウンセラーと遊戯治療者とはかなり見解の相違がみられたが各回毎のカウンセリングと遊戯治療とを比較すると、全体の流れに於ても、個人的にも母子の行動像

* 一般の児童相談・教育相談ではこの種の事例は相当な%を占めているものと推測される。

にかなりの共通点がみられる。たとえば、治療に対する認識度、人格の固さ、創造性に於て、母子間に明らかな共通性がみられた。

Ⅱ. 治療効果の順位および程度に於ても、母子間に明らかな一致がみられた。

Ⅲ. 治療観を規定する何等かの基本的な立場（われわれのは来談者中心療法である）が親のカウンセラーと子どもの遊戯治療者との間で一致していることが、個人治療の場合よりも一層強く要求されるものと思われる。

Ⅳ. 他の intaker から得た単なる診断的な情報のみによって、集団構成を決定することは危険であり、治療者自ら intake を担当し、一貫した治療観によって、治療者自らの判断にもとづき集団を構成すべきであるとする。

文 献

- (1) Axline, V.M. : Play Therapy, Boston, Houghton Mifflin (1947)
: Group Therapy as a Means of Self Discovery for Parents and Children, Group Psychother., 8 152~160 (1955)
- (2) Dorfman, E. : Play Therapy in C.R. Rogers' Client centered Therapy, Boston, Houghton Mifflin (1951)
- (3) Dreikurs, R. : Group Psychotherapy from the Point of View of Adlerian, Int. J. Group Psychother., Vol. VII, No. 4, 363~375 (1957)
- (4) Fox, L. : Group Therapy and Group Dynamics (茨城キリスト教学園カウンセリング研究所:昭和39年度大阪カウンセリング研究会に於ける講演)
- (5・1) Ginott, H.G. : Group Psychotherapy with Children, Mc Graw-Hill, 34~35 (1961)
- (5・2) : Differential Treatment Groups in Guidance, Counseling, Psychotherapy and Psychoanalysis, Int. J. Soc. Psychiat., 3, 231~235 (1957)
- (6) Hobbs, N. : Group-centered Therapy in C.R. Rogers' Client-centered Therapy, Boston, Houghton Mifflin (1951)
- (7) 森脇 要 : 子供の心理療法, 慶応通信, 64~65 (1959)
- (8) 小川太郎, 山根清道共訳 : S.R. スラヴソン 集団心理療法入門, 誠信書房, 49~50 (1959)
- (9) *Ibid.*, 127
- (10) *Ibid.*, 128
- (11) *Ibid.*, 137
- (12) *Ibid.*, 144
- (13) 小川太郎, 山根清道共訳 : S.R. スラヴソン 分析的集団心理療法, 誠信書房, 147~156 (1958)
- (14) *Ibid.*, 148
- (15) *Ibid.*, 153
- (16) *Ibid.*, 154
- (17) *Ibid.*, 156
- (18) *Ibid.*, 301
- (19) *Ibid.*, 301~302

Summary

Four mothers with emotional problems were given the group psychotherapy and their children (patients) given the group play therapy for an hour once a week. The results obtained are as follows.

1) The attitudes of four mothers in each session was observed to correspond to those of their respective children. For instance, the degree of change in mothers' understanding of therapy, their personality rigidity, and their creative ability were almost the same as those of their children.

2) As far as the effect of therapies with mothers and their children was concerned, the degree of change observed in both was similar.

3) It is found that in client-centered therapy the coincidence in intuition for therapy between counselor and play-therapist should be required in group therapy more than in individual counseling.

4) Our experience of group psychotherapy showed that it was not effective way to decide the conditions of group formation for therapy only by intakers' (who don't work with clients in terms of therapy) diagnostic informations, and that its conditions should be decided by therapist who are actually engaged in therapy. In addition, it was found desirable that therapist should have intake interview and continuously give the therapy.